

三年ほど前か、江戸部屋で、しばしば童謡のCDを聴くことにしている。とくに明治・大正期が中心で、昭和期のものはそれほど多くはない。確かに明治・大正期のほうが琴線に触れるのである。なせだろう。たぶん日本的共同体が崩壊していくとき、のノスタルジックが刺激されるからだろう。

とくにその歌詞にはほろりとさせられる。たとえば、「リンゴのひそりごと」という歌があるのだが、この歌詞を口ずさむたびに私は

作詞家の感性と時代を透視する知性に感銘を受ける。リンゴも擬人化しているのだが、「わたしはオツかなリンゴです」から始まり、このリンゴが「寒い北の国」から汽車で、「

リンゴ

町の市場」へはこぼれてきて、「お顔をまっかに磨かれて売りに出されるのだが、ふと「~~あつ~~」煙のむじいさん」を思い出す。今こそどうしているのだろうか、歌を~~聴~~唄いながら、リンゴを箱に詰めているか、それともたばこをふかしているか、とリンゴはつぶやくので



ある。

歌河の一節一節に、故郷を離れた人たちの望郷の念が宿っている。私はこの歌河に、なんともふれていくうちに、近代日本の諸相が浮かんで来て、涙ぐんだりもする。童謡とは幼児や小学生のときによく聞いておぼえておぼえても意味するところが大きいと気づくのだが、しかし老いと自覚することになって、かつて幼年期に聴いたメロデーを記憶の底からひっぱり出して、改めてその歌河にふれていくこと

初めてその真の意味が理解できる、そのことに私は驚いているのである。

「夕焼け 夕焼けの赤とんぼ……」や「赤い靴履いていた女の子……」など、その歌河を吟味しているうちに、作詞家・作曲家は重要なことを私たちがこの世代に託しているのではないかと思えてくる。

伴奏の合間に「童謡を聴く」、その充実した部分を私は今味わっている。